

正門の左側、空港よりの塀際（0区）にも百を越える、多かれ少なかれ世に名をなした人々の墓標が集められている。門に近い方から順に音楽関係者をひろってみると、ヨーゼフ・マイセーダー（ヴァイオリニスト、作曲家）、カール・チエルニー（多くのピアノ教則本の作曲者、ベートーヴェンの弟子）、アントニオ・サリエリ（作曲家、モーツァルト時代の大御所）、ヨーゼフ・バイヤー（日本で使用される初心者用ピアノ教則本「バイエル」の作者）、テオドル・レシェティツキー（ピアニスト、フランツ・リストと並ぶ現代ピアノ奏法の教祖）などの名前がみられる。

これらの地区以外にも音楽家の墓を見つける事ができるが、ぶらぶらと散歩しながらさまざまな墓標を比較観察してみるのもおもしろいだろう。墓石の下にはどんな骸骨がどのような格好で横たわっているのだろう…、などと想像してみるのも一興か。

## ドプリンガー

ウィーン一区の繁華街、グラーパーベンからちょっと横に入ったドロテアガッセという小路に「ドプリンガー」という名前の楽譜屋がある。ウィーンにいる音楽関係者でこの店を知らない人間はもぐりである、といえる程有名な専門店だ。

その名はウィーンに限らず世界的にも知れ渡っているが、もともとは「アイスグリュープル」という貸し楽譜屋だった。一八一六年に創立されたが、これをルードヴィヒ・ドプリンガーが買取り、新規開店したのが一八五七年の事であった。さらに一八七六年ヘルツマンスキーという有能な経営者が買取り、現在の形態である同族会社の基礎ができたのだが、それ以来、現在のヘルムート・パニー氏（ヘルツマンスキーの曾孫）

で四代目となる。

店舗は一八七三年から現在の場所にある。建物そのものには一六五〇年以来の歴史があり、こんな所にもウィーンの古い伝統が感じられよう。

初代ヘルツマンスキーはなかなかのやり手であった。店の従業員を大切にし、毎月の給料は必ず一人ずつ面接して手渡し、賞与はクリスマス、新年、誕生日、ナーメンスターク（洗礼名にゆかりのある聖者の日）、それに休暇から戻ってきた時、の年五回であった。レストランか楽譜店のどちらかを経営するのが若い頃の夢だったが（祖父はレストラン経営者、従兄弟はテアター・アン・デア・ウィーンの指揮者だった）、彼がたまたま楽譜の出版・販売の道を選んだ事は、今日に至るまでの音楽家と音楽ファン達にとって幸いな事だったといえよう。当時はブラームスやブルックナーが活躍し、ヴェルディのレクイエムが初演され、バイロイトではワーグナー祝祭音楽祭第一回目が催され、という時代であった。

店の経営は楽譜販売、古楽譜の買い入れと販売、貸し楽譜、それに楽譜出版業の五つのセクションを中心に始められたが、今日もこれにレコード販売と楽器販売が加わったぐらいで、基本的には全く変わっていない。ブルックナーの作品の多くはドプリングァー社でその初版が発行されているし、レハールの「メリー・ウイドー」のピアノ編曲版など楽譜出版業界では空前の大ヒットとなり、中でも「バルシレーネン・ワルツ」のピース版は出版後数年にして三十万冊以上を売りさばく、という勢いだった。

この当時、レコードというものはまだ出現しておらず、交響曲であれオペラであれオペレッタであれ、それをピアノソロ、あるいは連弾用に編曲して販売するのが楽譜出版社の重要な業務だった。

現在どの家庭にもステレオがあるのと同じように各家庭にピアノがあり、「ピアノを弾ける」という事は一般家庭の子女にとって、何よりも大切な躰のひとつだった。その後SPとは言えレコードが出現し、映画

も無声映画からトーキーの時代になっても、しばらくはピアノ全盛時代が続く。新しい映画がかかると同時に主題歌がカフェで演奏され、それと並行して楽譜も手に入る、という状況を作り上げるのがその映画をヒットさせるための重要なマーケティングだった。一昔前にはやった「テーマ音楽サントラ盤」に代わるものである。

このようなピアノ指向時代は第二次世界大戦とともに終わりを告げる。多くの楽器が暖房用の薪にされたり爆弾などで壊れてしまったのも一因であるが、それよりも戦後に建てられたアパートが狭く、壁も薄い、という事情の方がピアノ万能時代終焉の大きな原因となっている。それに加えてレコードやラジオを通じてどんな音楽でも自由に聞けるようになり、苦勞してピアノで弾かなくても楽しめるようになった、というのも、あらがえぬ時代の流れであった。

楽譜販売はともかく、楽譜出版業にはリスクの大きい「かけ」の部分がある。今日スタンダードの名曲として誰もが愛し、その価値を疑わない作品も、発表当時はまだ素性の知れない「現代曲」だった。ファンの層が厚いポピュラー曲でさえ、果たしてヒットするかどうかは「神のみぞ知る」である。しかしそれらの作品を出版して世に問い、後世に残すのも、文化事業として計り知れぬ価値のある行為だろう。膨大な時間と費用のかかる印刷楽譜製作ではあるが、それをうまくプロモートしてコマースシャルベースに乗せるのが楽譜出版社の一大課題であると同時に、その会社のプレスティージにもつながる。

ドプリンガー社は一九〇一年に共同経営の会社として設立されたユニバーサル社と並んで、オーストリアの作品のみならず数多くの楽譜を世に出してきた。ドプリンガー社から作品の出版された作曲家は今までに六千人以上、作品は二万曲近くにのぼる。社員九十人、と規模こそ特別大きくはないが、現在では世界でも有数の名門音楽出版社の一つである。

一般に馴染みの深い楽譜売場をのぞいてみよう。ドロテアガッセ十番には建物の入口（ここは事務所入口である）をはさんで左右両側に同じような構えのショーウィンドーがある。それぞれにガラスのドアがあり、向かって右側、つまりグラーベンに近い方のドアを押し入ると、ここが一般楽譜（ピアノや室内楽、各種スコアなど）と音楽書の売場である。レジの横を抜けて右奥に入っていくと古楽譜（時間をかけて捜すと掘り出し物も見つかる）、ミシミシという階段を登ると教会音楽やコーラスの楽譜売場となる。奥の売場は一見「関係者以外立入り禁止」のように見受けられるが、誰でも自由に出入りして構わない。

建物左側、グラーベンから遠い方の入り口は、入って右手がオーケストラ・プラスチックバンド関係とポピュラー、及びホイリゲで歌われるようなウィーン民謡などの楽譜売場、左手がレコード売場である。

楽器部門は入口が別で、建物のすぐ右隣りにある。あまり大きくはないが、オルフ楽器などの教育用楽器もここで手に入る。

この店に勤めている人は職業専門学校で「音楽書販売業」という三年間の専門課程を終えたエキスパートばかりである。音楽好きでないと勤まらない職業であるし、自分でも楽器を演奏できる人がほとんど。彼らの専門知識は広く一般市民からも尊重され、学生や音楽ファンからの「ストラヴィンスキーの生年月日は？」とか「マーラーの交響曲は全部で何曲？」などという電話での問い合わせは日常茶飯事である。

それに加えて、うる覚えの記憶を頼りに楽譜を買いにくる客が何を求めているのかを想像たくましくして適切に判断するのも、必要不可欠な技能である。「ムソルヴィンスキー」とは「ムソルグスキー」の事であるし、「レスコー作曲のマノン」はマスナーのオペラ「マノン・レスコー」、ベートーヴェンの「エリーゼのために」は「ルイーゼのために」とか「アンネリーゼのために」などいろいろな変化をとげる。

バッハの作曲した「インヴェンツィオーネン *Inventionen*」という初心者も使う楽譜は、

インヴァツイオーネン(？)、インヴァジョーネン(侵入)、インテルヴェンツイオーネン(仲裁)、インエクトイオーネン(注射)、インフェクトイオーネン(感染)、インヴェステイツイオーネン(投資)、イミタツイオーネン(模倣)などという、さまざまな名前のもとに子供が買いくる。

メンデルスゾーンの「葬送行進曲」は客の顔色をよく見て問いたださないと、有名な「結婚行進曲」との取り違えであるのか、四十八曲の小品が集まっているピアノのための「無言歌集」二十七番目の「葬送行進曲」を指しているのか判断が難しい。

中でも傑作なのは「Süß und dick 甘いデブ」というオルガンの曲を買いに来た客である。初めは何の事か皆目見当のつかなかったこの曲も、前日に「Suite gottique ヲシック組曲」というレオン・ボエルマンの曲がラジオで放送されたのを思い出した店員の機転によって、解決がついた。「組曲」と「甘い」という単語は、英語では両方ともスウィートと発音する + 甘いものは太るという潜在意識 + *gottique* の語尾ティックをドイツ語のディック(太い)と聞きまちがえた、という噴飯物であった。まるでクイズをやっているようなものだ。

建物の地下にある大倉庫には三十万曲以上の楽譜がストックされている。なるほどの町のどんな楽譜屋さんでも見つからなかったものが、いとも簡単に即日この店で手に入るわけである。その上、世界にある三百以上の出版社との提携を頼りに、たとえばアメリカの大学で出版されたような、普通なら入手を諦めてしまいがちな出版物をも手に入れることができる。そしてその際に、どこをどう捜すと見つかるか、という情報と手続きとを熟知している店員の適切なアドヴァイスは、なによりも得がたい助けである。

これなしにはどんな大規模な専門店もその価値が半減する、というポリシーを忠実に守り、今までも、そして今後、支店を出す予定は全くないそうである。